上映映画解説

1954, 8

国立近代美術館　フィルムライブラリー

No. 26

月例映写会について

国立近代美術館では、フィルム・ライブラリーで内外古今の優秀映画の収集保存とその活用に努めております。今回は「水彩と素描」展の期間中、月例映写会として次の新作短篇映画三本を、月・水曜日を除く毎日二時から上映いたします。

アイヌの川魚　二巻

文部省学術映画シリーズ5

企画　文部省大学学術局
製作指導　財団法人　日本民族学協会
製作担当　岩波映画製作所

アイヌ族は北海道・千島列島及び樺太に居住する一種族で、彼等はその形質、文化の両面からみて、周囲に居住する諸種族とは趣を異にし、いわゆる人種島としての特徴を示していたが、それは十九世紀の中葉以来、北海道及びその周辺に多数の日本人が移住するに及んで急速に消滅しはじめた。

形質上の特徴の消滅は主として混血によるものである。日本人との接触の初期においては、日本人の来住者でアイヌの娘を一時的妻とするものが少くなく、子供たちは通常アイヌ社会に残された。その後は日本人の貧窮の小供たちが「もらい子」の形でアイヌ社会に養い取られた。したがつてアイヌの純血を保つているものは、わずかしか認められない。

また過去において彼等の生活を支えていたものは鮭その他を目的とする川漁、鹿及び熊等を対象とする山猟、祭祀用の酒の原料として河原の氾濫地における僅少な粟の栽培等であつたが、かかる生活の場に、一時に多数の日本人が移住を開始し、近代的な方法による乱獲をはじめたため、海の幸、山の幸も急激に減少し、アイヌの生活文化は根底から変化せしめられた。これに対する政府の保護政策により約六十年前からアイヌの生産生活は急速に農耕段階に入り、固有の文化は激変して行つたのである。

従来　アイヌ族の形質及び文化に関する研究は、各方面において行われていたが、一九五一年に財団法人日本民族学協会を中心とし、人類学、民族学、社会学等の関係諸学者三十数名からなる「アイヌ民族実態調査総合研究班」が結成されてから大規模なアイヌ族の総合研究が行われているが、本映画は、これまでに挙げた成果のうち、アイヌ民族本来の生産生活でもつとも重要な行事の一つであつた川漁を中心に彼等の生活を記録したものである。

映画は鮭漁及びシシャモ漁の二篇に分かれている。鮭漁篇は、北海道で一番大きな川である石狩川の支流千歳川に、秋から冬にかけて上つてくる鮭をその川筋に住むアイヌたちがいかにしてとらえたかその姿を再現したもので、漁場にたてられた家での初漁・豊漁の祈り、（同時録音）漁法、調理方法等が収められている。

シシャモ漁篇は「神の国の川のあぜにはえていた柳の葉が、あるときアイヌコタンの（部落）に落ちたので国造りの神をはじめ、他の神々が大変驚き、シシャモ（柳の葉魚）という魚の姿に変えて永遠の生命を与えた」という北海道胆振（イブリ）の国の鵡（む）川に伝ゆる神話を中心に漁の全ぼうを記録したもので豊漁の祈願祭、漁具の作製、漁期における男女の分担作業、加工と貯蔵方法とが、情緒的効果をもつて収められている。

（文部省大学学術局提供）

皇居の水鳥　二巻

世界文化映画株式会社作品

企画・製作　有坂哲一
脚本・演出　山口順弘
撮影　広川朝次郎
指導　鷹司信輔
　　内田清之助

皇居内園の撮影をはじめて許可されて、普通紅葉山といわれ、道灌堀といわれる内園一体を中心に、お堀に住んでいる夏の野鳥の生態を記録した映画です。「おしどり」「かいつむり」「きじ」「さぎ」「こじゅけい」などが画面に出てきますが、都会の真中にこのように多数の野鳥が住んでいることは非常に興味があります。中でも注目されることは、「おしどり」の巣立ちの実態を撮影するのに成功していることです。元来「おしどり」の巣は高い梢にあつて、そのひながどういう方法で水面に達するのか学界でも謎とされていただけに、この記録は非常に貴重なものといえましよう。又「かいつむり」の浮巣つくり、産卵からひなの巣立ちも珍らしいものです。

生活と水　二巻

企画製作　岩波映画製作所
後援　厚生省

この映画は、水道、特に町村の簡易水道の啓蒙普及を目的として、厚生省の後援の下に製作されたものです。水道のない生活がどんなに非衛生的で不便なものかということを、各地の実例によつて先ず描き、このような欠点を解決しようとする町村の人たちの努力と実際の姿を紹介しています。水道の問題と広い生活との関連を描きながら、各地町村で行われている建設作業の実態と、更に多くの水道が日本全国に必要なことを強調しています。